

ねがいのいえニュース 第76号

社会福祉法人ねがいの社 広報紙・2026年1月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0046 さいたま市西区宮前町812-2

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail info@negainoie.ne.jp Hp http://www.negainoie.com



明けましておめでとうございます。感染症が流行っていますが、みなさまお元気ですか？ねがいの社は昨年、計画していた施設整備が全て完了し、これからは支援の質を上げていかなければならないと、心を新たにしている日々です。

「くちづけ」レポート

サンシャイン劇場で上演された演劇「くちづけ」を観た。障害者グループホームを舞台にしたストーリーだが、ほのぼのとした日常を描くことに終始せず、30年前の日本社会の実像を怖れずに描き切った作家の信念を感じるドラマだ。この社会問題を多くの人に伝えるため、5年に一度再演すると決めているのもその信念の現れである。コロナ禍で制限された5年前の怨嗟を振り払うように、今回の上演が今までで最高だったというリピーターの声が多かったそうだ。

登場する知的障害の方たちは、会話ができて、作業所に自分で通い、自転車が好きに出かける人もいて、軽度な障害に区分される方々。その特色そのままに、日常の暮らしは彼らの面白おかしやりとりで笑いがあふれる。そのタイプの方たちが集まる現場で実際に見られるほほえましい日常である。しかしそれぞれに自閉的なこだわり、生きづらさがあり、時にパニックを起こして乱暴を働いたり、近所の家に勝手に上がり込んでスタッフが謝りに行ったりなど、これもまた実際の支援現場で起きるエピソードが描かれる。

このドラマを観るだけで、この日本社会で実際に起きていることを学ぶ研修として成立するほど、セリフの中に障害福祉界の問題が凝縮されている。福祉の専門家ではない作家がここまで学んでくださったことに、専門家として敬意を表したい。そしてその会話の中で紹介される、刑務所における知的障害者の率が高い問題や、ホームレスと呼ばれる人々の中にも障害者が多く含まれている問題が、ラストの悲劇につながる重要な伏線となっていく。

ドラマはグループホームで暮らす、自閉傾向を有しながらも多弁で面白くて心優しい男性うーやんと、新たに入居してきた女性まこちゃんの出会いを軸に進む。過去のトラウマから男性を怖れるはずのまこちゃんが、うーやんには最初から怖れを見せず惹かれあっていく様が、温かな BGM とマッチして観客を幸せな気持ちに誘う。やがて結婚の約束をする2人に、幸せになって欲しいと全ての観客が願ったことだろう。

しかし、実際に起きた事件を報道する一片の新聞記事からこの物語を書き起こした作家の信念は妥協を許さない。グループホームの経営が行き詰まり閉所が決まる。支援法がなかったころ、障害の子を一生面倒みるのは両親、あるいは兄弟の責任と思われた時代、結婚をあきらめ兄を一生支えていく、と決めたらうーやんの妹の決意と、それを称賛する周囲の反応に、まこちゃんの父が追い詰められていく。

社会が支える責任と機能を果たしていなかった当時、家族は子を手放すことができず、子は家族から離れることができなかった課題もまた、このドラマは映し出す。親がわが子を手にかけて報道を目にするたびに、激しい行動障害や夜間も絶え間ない介助に追われる壮絶な大変さを想像するが、愛らしさでいっぱいの子まこちゃんに手をかけるまでの父の心理は、これまでのドラマで描かれたことのない緻密でリアルな過程だった。

愛らしさの際立つまこちゃんが、まるで本当に知っている子のように見え、観劇以来、今も切ない悲しみで胸がふさがれる。劇中で彼女が歌う「グッド・バイ・マイ・ラブ」を、気がつけばいつも口ずさんでいる。障害者の支援制度が整った30年後の現在なら、家族がいなくなってもグループホームで暮らすことができたことだろう。南高愛隣会や原町成年寮のように知的障害者同士の結婚と育児まで支える団体も現れた。時代は変わった。

しかし、本当にそう言えるだろうか？



本当に時代は変わったか？

障害者の地域生活を推進すると決めた国の政策により、グループホームの整備は急速に進み、入所施設で暮らす方の数を上回って数年が経つ。国は新たな入所施設は作らないと宣言した。しかし実際にはグループホームで暮らす人のほとんどが軽度の障害者で占められ、強度行動障害や医療的ケアなどの重度重症の方は断られている。一緒に暮らせなくなった時あわてて施設を探すが、つい最近も「空きがあるのは青森か長崎」と告げられた家族がショックを受けていた。30年前と何ら変わっていない。それどころか、状況は悪化したように感じられる。

30年前はそれでも、どこか遠くに行けば空いている施設を見つけることができた。今は国の政策により新しい施設ができていない。加えて、医療の進歩により障害者の寿命も延びて、施設が空かなくなった。どんなに遠くまで探しても空きがみつからない時代が来てしまった。支援費制度以来この20年、減少していた悲劇の報道が、ここ数年で逆に増えてきたと感じるのだ。

悲劇の時代を繰り返してはならない。それは誰に責任があるのか？誰が何をすべきなのか？昭和の暗黒時代を経て迎えた21世紀、支援費制度に始まり現在の総合支援法に至り、様々なサービスが整備された。それまでの過程には、多くの人の悲しみと叫びがあり、国を動かした人々がいた。ほとんどの障害者家族は親の会に入り、署名や寄付を呼び掛けて、国会に訴えを続けた。そんな歴史の積み重ねの末に至った現代は、障害の子が生まれた時から支援を受けることができる社会になった。そして、若い家族は親の会の活動に参加しなくなった。何も訴えなくても療育が受けら

